

大阪外国語大学グリークラブ

創部98周年記念演奏会

賛助
出演

有機的演奏単位グラ・デ・イーヴォ
大阪男声合唱団東京支部

2024年 12月8日

かめありリリオホール

13:30開場 / 14:00開演 1,000円(全席自由)

主催：大阪外国語大学グリークラブOB合唱団

98年の歩み

大阪外国語学校（大阪外国語大学）グリークラブは、開校（1922年11月）から3年半後の1926年4月に部員20数名で誕生しました。創部翌年（1927年）の宝塚音楽協会主催の第1回合唱競演会で3位入選、1929年にクラブソングGAIGO WILL SHINE TONIGHTが誕生、そして1931年には後の大作曲家清水脩（フランス語科）が第5代指揮者に就任するなど、創部当初から活発に活動しています。

戦時中の活動記録はありませんが、終戦の翌々年（1947年）には活動を再開しています。1957年に念願の第1回演奏会を開催し、以降1998年まで毎年演奏会を開催（計41回）しただけでなく、演奏旅行やジョイントコンサートなどさまざまな演奏活動を行っています。しかし、大学における男子学生の減少もあり、グリークラブは1998年に活動休止のやむなきに至りました。

現役のグリークラブは活動を休止しましたが、外語グリーの歴史と伝統を受け継ぎ、外語ハーモニーを繋ぎ続けたいとのグリーOB有志の強い思いで、東京（1995年）と大阪（2001年）にOB合唱団が結成され、指導者に林誠、小貫岩夫、坂井美樹の各先生をお迎えし、創部80周年（2006年）、85周年（2011年）、90周年（2016年）、そしてコロナ禍のなかでの95周年記念演奏会（2022年）など周年記念演奏会だけでなく、大阪男声合唱団など他団体とのジョイントコンサートの開催、東京都合唱祭や男声合唱フェスティバルへの出演などのさまざまな演奏活動を続けています。

母校大阪外国語大学は2007年10月1日に大阪大学と統合しましたが、私たちOB合唱団は現在でも「大阪外国語大学グリークラブ」の名を掲げて活動を続けています。仕事を抱えながら或いは仕事を卒業して再びグリークラブに戻ってきた者たちに加え、別の環境から新たに加わった仲間たちが現在のグリークラブOB合唱団を構成していますが、外大らしさを保ちながらもさらに一步上を目指して練習に励んでいます。

2年後の2026年には創部100周年という大きな節目を迎えます。OB合唱団のメンバーだけでなく、外語グリーのOBの皆様方と100周年をぜひ祝いたいと今から楽しみにしています。



第2回コーラスの玉手箱（川口総合文化センター・リリアホール） 2022年11月27日

ご挨拶

大阪外国語大学グリークラブ創部98周年記念演奏会にご来場いただき誠にありがとうございます。
総務省の社会生活基本調査では2016年には約323万人いた合唱人口が、2021年には約186万人にまで減少したそうです。男声合唱は特にそれ以前からその傾向が顕著であったのではと推測します。合唱をこよなく愛する我々としては大変さみしいかぎりです。

大阪外国語大学グリークラブは1998年の定期演奏会を最後に活動を休止しましたが、今から半世紀以上さかのぼる1960年代には部員が60名程度いたので、今思うと夢のような世界です。

OB合唱団については1995年から活動を始めました。今日まで単独の演奏会やジョイントコンサートなど活動を続けていますが、ただ現役部員がいなくなったため高齢化の影響は避けられず、身体的な衰えに抗いながらもなんとか素晴らしい演奏をするべく奮闘しています。さて今日はどのような演奏をお聞かせできるでしょうか。

最後になりましたが、本演奏会開催にあたりご協力をいただきました関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大阪外国語大学グリークラブOB合唱団(東京)代表 永谷 勉

創部98周年記念演奏会の開催おめでとうございます。100周年という記念すべき年を前にして、三段跳びで言うと「ステップ」の位置付けの演奏会。次を見据えての大事なコンサートです。多くの合唱団がコロナ禍で活動を停止し、消えていきましたが、外語グリーはしぶとくオンラインでの練習を続け、集まってはそれぞれがビニールに囲まれたボックスの中で歌い、活動を止めませんでした。そしてコロナ禍での前回のコンサート(2022)を経て、今回こうして開催できますことは、外語の皆さんの情熱の賜物であり、頭がさがる思いです。今回はいつも仲良くしていただいている大阪男声合唱団さん、そして初めてご一緒するグラ・ディーヴォさんと共演します。どの様な相互作用が働くか…乞うご期待。ご来場いただいた皆様も、存分に男たちの情熱のこもった演奏をお楽しみください。

指揮 小貫岩夫

本日は98周年記念演奏会の開催おめでとうございます。外大の特徴は？と聞かれれば、おおらかな方々による合唱団と言うでしょう。外大OB以外の方も多く参加されて、とても楽しんでおられる。それを喜び受け入れて一緒に歌う！飲む！呑む！98周年！合唱団を継続する秘訣でしょうか。

おおらかすぎて、コンサート前には、本当に歌えるの？この編曲難しい…ハーモニーは？自由に歌いすぎる！と思うこともたびたび。それでも音楽が少しずつピタッと合い始め、あ、素敵！そうそう、良い感じ！となっていきます。そしていよいよ本日です！

おおらかで朗らか、更に繊細な部分をも持ち合わせている外大の皆さんが、楽しんで情感たっぷりにハーモニーを響かせるスピリチュアルズ！どうぞ皆様ご期待ください！

指揮 坂井美樹

PROGRAM

Gaigo Will Shine Tonight / Varsity

第 1 ステージ

Sea Chanties 指揮：小貫岩夫 ピアノ：土井あかね

1. Whup ! Jamboree
編曲：Alice Parker and Robert Shaw
2. Shenandoah
編曲：Marshall Bartholomew
3. What Shall We Do with the Drunken Sailor
編曲：Alice Parker and Robert Shaw
4. Sailing, Sailing
編曲：Roger Wagner
5. Good-Bye, Fare Ye Well
編曲：Alice Parker and Robert Shaw
6. Spanish Ladies
編曲：Alice Parker and Robert Shaw

第 2 ステージ

男声合唱組曲「海豹と雲」

作詩：北原白秋 作曲：多田武彦

演奏：有機的演奏単位グラ・ディーヴォ

1. 獵夫
2. 朝
3. 青野
4. 曇り日のオホーツク海
5. 風を祭る
6. 冬の夜

【 休 憩 】

第3ステージ

黒人霊歌 指揮：坂井美樹

1. My Lord, What a Mornin'
編曲：Fenno Heath
2. Dry Bones
編曲：Donald Moore
3. Sometimes I Feel Like a Motherless Child
編曲：不明 補作：池田守
4. Swing Low, Sweet Chariot
編曲：William L. Dawson
5. Ain'-a That Good News
編曲：福永陽一郎
6. Go Down Moses
編曲：福永陽一郎

第4ステージ

男声合唱組曲「雪明りの路」 作詩：伊藤 整 作曲：多田武彦

合同演奏／指揮：小貫岩夫
大阪外国語大学グリークラブOB合唱団
有機的演奏単位グラ・ディーヴォ
大阪男声合唱団東京支部

1. 春を待つ
2. 梅ちゃん
3. 月夜を歩く
4. 白い障子
5. 夜まわり
6. 雪夜

1 Sea Chanties

Sea Chanties は、16 ～ 19 世紀の帆船時代に、船乗りたちが皆で力を合わせて帆や錨を上げ下ろす時の労働歌として歌われたり、長い船旅を終えて、懐かしい故郷へ帰る喜びの一方、港、港に残した人に別れを告げなければならない、少々複雑な心境を歌ったりした歌です。

帆船時代は、英国の商船隊が世界の海を席卷していたので、英国の船乗りの歌として多く残っています。Sea Chanties が持つ男性らしい力強さから、男声合唱が得意とする分野として、多くの男声合唱団に取り上げられています。

1. Whup ! Jamboree

Now, my lads, be of good cheer, for the Irish land will soon draw near. In a few more days we'll sight Cape Clear, O Jenny, get your oatcake done (さあ、野郎ども、元気を出せ、アイルランドが近づいてきた。あと数日でクリア岬だ。ジェニー、オーツケーキを焼あげろ) と力強く歌いあげます。

2. Shenandoah

Shenandoah (シェナンドー) は、アメリカの開拓時代初期から伝わる歌で、アメリカ東部のバージニア州からウェストバージニア州を流れる川の名前でもあります。当時のアメリカ・インディアン酋長の名前であるとか、川を行き来していた毛皮商人が恋した酋長の娘の名前であるとかという説もあります。この川の情景、あるいは恋心が美しいメロディーとして綴られています。

3. What Shall We Do with the Drunken Sailor

この歌の歌詞の中に、“Way hay and up she rises”(ウェイヘイ 帆を上げろ) とあるように、水夫たちが帆船の帆を上げるときに、タイミングを合わせてロープを一斉に引くために歌われたとされています。歌詞の中には、“What shall we do with the drunken sailor”と「酔っ払った水夫をどうしたらいいか」と尋ね、その答えとして、“Put him in the long-boat untill he's sober”(酔いが覚めるまでボートで寝かせておけ) とユーモラスに歌います。

4. Sailing, Sailing

イギリスのジェイムズ・フレデリック・スウィフト(1847年-1931年) によって1880年に書かれたイングランドを離れる船出の歌で、“A pleasant gale is on our lee, And soon across the ocean clear. Our gallant barque shall bravely steer. (心地よい強風が風下に吹いており、すぐに海の向こうは晴れる。私たちの気高い帆船は勇敢に進んでいく) と歌います。船乗りたちの新しい航海への昂る気持ちを歌っています。

5. Good-Bye, Fare Ye Well

“Good-bye fare ye well. We are homeward bound”と、長い船旅を終え、寄港地の友人や知人らに別れを告げ、懐かしい母港・故郷へと向かう家路の海路をゆく切ない曲調となっています。停泊地で出発前にいかりを引き上げる巻上げ機を水夫たちが押し動かすときに歌われたといわれています。

6. Spanish Ladies

Farewell and adieu to you, Spanish ladies, for we've received orders for to sail for old England, But we hope in a short time to see you again. (さよなら、ごきげんよう、スペインのご婦人たち。わがなつかしのイギリスへの帰還命令が届いたからなのだ。でも、君達に会いにすぐに戻ってこよう。) この曲は第一次大英帝国戦争(1793 ～ 1796 年)あるいはスペイン独立戦争(1808 ～ 14年)中に作成されたと考えられています。スペイン人の妻、恋人、子供を連れずに英国に帰還した英国兵士の間で人気になりました。

2 男声合唱組曲「海豹と雲」

詩集『海豹と雲』（1924年）は、北原白秋が北海道を訪れた体験を基に、自然やその土地の人々の生活・文化を幻想的に描いた作品です。白秋は稚内や利尻島、礼文島を訪れ、北の厳しい自然と広大な風景から大きなインスピレーションを受けました。白秋は北の海や雲、荒涼とした風景のイメージを抱き、それは詩作を通じて幻想的な表現に昇華されました。

1924年当時の北海道は、関東の人間にとっては「開拓地」「自然豊かで厳しい土地」であり、気軽に足を運べる場所ではありませんでした。また白秋自身もこの時39歳で、家庭では3人の子供を育てながらも、前後3回の結婚に象徴される多くの問題と責任を抱えていました。詩集に顕されている、北海道の自然や文化、人々に対する、エキゾチックな新世界としての感動と畏怖、憧憬は、そうした白秋自身の生活背景との対比の中で浮き上がってきたものなのかもしれません。男声合唱組曲「海豹と雲」は、2001年の第1回東京都男声合唱フェスティバル開催を記念して、東京都合唱連盟よりの委嘱を受け、作曲されました。同年に偶数楽章にあたる3曲が初演され、翌年の第2回東京都男声合唱フェスティバルで全曲が初演されました。

1. 猟夫

北海道の狩人が、その雄大な自然という「神神」と向き合い、自然と獲物に恋のような憧れを抱き、自らの意思を矢に込めて放つ。その姿に、その矢の音に、人間本来の原初の衝動や本能に律動された所作の美しさ・精神の逞しさを詩人は見ました。

かさや人々の営みが感じられない、冷たく静かで広大な海は灰色で、曇天との水平線も曖昧となり、無限の広がりをもって詩人に迫りました。詩人の精神はその自然や無限と一体化したような感覚に包まれました。

2. 朝

訪れたトラピスト修道院の朝ミサの静かな祈りと日の出の美しさを重ねて描いています。当時の北海道は、「西洋」と「日本の自然」が交差する象徴的な場所でした。その神秘的で浄化された時間と空間を詩人は讃えました。

5. 風を祭る

陽の光や自然そのものから、空や海、そして人々の営みや、一人一人の人間にまで吹き続ける北海道の風は、まさに自然と人間の調和の象徴であり、あらゆるものが風に包まれる様に詩人は深い畏敬の念を抱きました。

3. 青野

北海道の広大で青々とした野原に、自然にあふれる生命力や清々しさを感じます。吹く風からも自然の生の息吹を感じ、そこに生きる動物や少女にまで同じ生命力が美しく漲り、自然と人間が調和している様子を詩人は感じました。

6. 冬の夜

荒々しい波音の中で赤ん坊を寝かしつける父親の姿から、幼いころから寒く厳しい自然にさらされることで育つであろう、逞しい生命力が予見されます。そしてそれを暖かく見守る親の愛情、それらを包む北海道の人の全ての営み、ぬくもりが、寒さの中で照る火に美しく映し出され、詩人は人の生命や精神の真実を垣間見ました。

4. 曇り日のオホーツク海

北のはて、オホーツク海は、白秋にとって身近であった北九州や三崎の海とは全く異なりました。温

3 黒人霊歌 (Spirituals)

19世紀に生まれたアメリカ黒人のキリスト教的宗教歌。17～19世紀、新大陸の開拓の為に、多くの黒人たちが、アフリカの各地から奴隷としてアメリカに強制移住させられました。彼らの生活は惨めなものでしたが、虐げられた奴隷制度の中で、新しく覚えた讃美歌や聖書に勇気づけられ、ひたすら神の救いを求めて、死後、主のもとへ行けることを願い、そうすることによって現実の苦しみから逃れようとしていました。一日の苦役を終え、夜遅くに仲間たちと秘密裡に集まり、神に祈り、歌いあって切迫した日々からの解放、人間としての真の自由を求めたのでした。このように、彼らによって歌われた祈りの歌、魂の歌が黒人霊歌なのです。

歌詞も旧約聖書の逸話から多く取り入れられているのが特徴といえます。黒人訛りの英語と、自らのルーツであったアフリカ音楽のリズムが加わって、独特の新しい音楽を作り出した黒人霊歌は、ゴスペル、ブルース、ジャズ、部分的にはアメリカン・フォークソングなど様々な音楽の源となりました。伴奏楽器もなく、楽譜があった訳でもありませんので、これらの曲は、口移しで伝えられ、1850年ごろから広く人々に知られるようになり、1880年ごろに初めて採譜されました。現在、およそ450～500曲が黒人霊歌として知られていますが、その中から、本日は6曲を演奏いたします。

1. My Lord What a Mornin'

マタイによる福音書24章29－30節の「たちまち 太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子の徴が天に現れる。天の星は地に落ちた」(新共同訳)という聖句をベースにした黒人霊歌で、イエスの再臨と神の最後の審判が、「星が空から落ちる」など恐ろしい光景として歌われます。

2. Dry Bones

エゼキエル37章の聖句をベースにした黒人霊歌です。神はエゼキエルを幻のうちに一つの谷に導かれますが、そこは干からびた骨で満ちていました。エゼキエルが神に導かれて、これらの骨に向かって神の言葉を語ったときに、骨が集まり、筋と肉と皮が生じ、人の姿になります。この歌では、つま先の骨 (toe bone)、足の骨 (foot bone) と下部から上がっていき、頭の骨 (head bone) に達する様子を音程が半音ずつ上がっていくことで表しています。

3. Sometimes I Feel Like a Motherless Child

19世紀にアメリカで生まれた伝統的な黒人霊歌で、アフリカからアメリカに連れて来られ、母親には二度と会えないという過酷な境遇にあった黒人労働者たちが、「故郷から遠く離れた」(a long way from home) 場所で、故郷のアフリカを思いつつ「時には母のない子のように」と嘆き悲しみつつ歌います。

4. Swing Low, Sweet Chariot

南北戦争後に先住民チョクトー族の奴隷が歌っていたとされています。歌詞には、戦車 (chariot) に乗って天国に昇る描写がありますが、これは旧約聖書の中でユダヤ人の預言者エリヤが火の戦車に乗って天に昇っていく様子を描いているとされ、黒人奴隷たちの自由な世界への脱出の願望が込められています。

5. Ain'-a That Good News

「わたしはこの世を捨てて、十字架をかつぐとして。天の故郷に、わがイエスのみもとに行こうとして。良い知らせじゃないか！」と苦しい奴隷生活から解放されてイエスのもとに行く願望を、速いテンポで歌います。

6. Go Down Moses

この曲は世界で最初に楽譜となった黒人霊歌といわれています。旧約聖書の「出エジプト記」に記述されている預言者モーセによるイスラエル人のエジプトからの脱出がテーマとなっています。モーセは「我が民を解き放て」(Let my people go) という神の言葉をエジプト王ファラオに告げます。それでも、ファラオは頑なにイスラエル人を解放しようとしません。黒人奴隷たちはそこに自らの境遇を重ね合わせたのかもしれません。

(本稿は、小川洋司『深い河のかなたへ 黒人霊歌とその背景』などを参考に作成しています)

4 雪明りの路

伊藤整は、1905（明治38）年に生まれ、幼少のころ小樽に転居して以来、小樽で育ちました。彼が21歳だった時に、初めての詩集『雪明りの路』を自費で出版します。この詩集の序で伊藤整は「此の詩集の大部分を色付けてあるのは北海道の自然である」と述べているように、小樽近郊などの自然を詠っています。

小樽では、1999年より毎年2月に、「小樽雪あかりの路」と名付けられた「雪とろうそくの祭典」が開催されており、冬の北海道を代表するイベントとなっています。「小樽雪あかりの路」Webサイトには、以下の文章が綴られています。

市民による手作りで1999年から続けてきた小樽雪あかりの路。

目指すのは、規模の拡大ではなく、「想い」の広がり、そして「心」の繋がり。

雪の中に揺らめくあかりに、癒され、願い、時として祈る。

暖かく、穏やかで、愛に溢れた平和な日々がいつまでも続きますように……。

このサイトには、『小樽雪あかりの路』は、伊藤整『雪明りの路』にちなんで命名されました」とあり、さらに、「明治、大正、昭和、平成、令和と年代は変わっても、私たちが忘れてはいけない『何か』が、『小樽雪あかりの路』の感動の原点となっています」とも記されています。

1. 春を待つ

ふんわりと雪の積った山かげから 冬空がきれいに
晴れ渡ってある うっすら寒く 日が暖かい 日向
ぼっこするまつ毛の先に ぼっと春の日の夢が咲く

2. 梅ちゃん

梅ちゃんの家は焼けた ぼくと遊んだ頃の 婆さん
は死に 爺さんひとりひとり居る藁家で 春の雪ど
けの晩 爺さんが酒をのんで火をだした 火を吹い
て 吹いて あの藁家が崩れた 春になって 草が
まっ蒼にのびた頃にも 焼けあとには黒い掘立杭が
立ってゐた ぼくが十八の春 梅ちゃんは小樽のげ
いしゃ あの藁家は燃えちまったよ

3. 月夜を歩く

泣きやんだあとの様に 月が白い輪をもった夜更け
て 私は ひとり忍路の街を通りぬける 切通しを
のぼりきれば 海が見える さびれた家並みがある
海は湾の内に死んで 灰色の背を見せ 家々は寝
しづまってゐる そとに夜どほし立ってゐる桐の木
の花が 甘く 鋭く匂ってゐる……。

4. 白い障子

風がひと吹きすぎると ざあっと 豆を撒いたや
うに雨が屋根をたたく すゝで赤くなった室には
障子が立てられ みんなは暖かい夕食の箸をとる
秋が来たので 白い障子の立てられた中で

5. 夜まわり

夜まはり 夜まはり 毎晩月夜に歩きまはるので 爺
さんの目は赤くただれてしまった からん からん
人はふかく寝込み 夜はたいへん更けて 悩ましい夢
が巷にただよってゐる からん からん 家の角は白
くけぶって 人の知らない月影がある 黒い装束に顔
の大きな 爺さんの目は赤くたゞれてをった

6. 雪夜

あゝ 雪のあらしだ 家々はその中に盲目になり
身を伏せて 埋もれている この恐ろしい夜でも
そっと窓の雪を叩いて外を覗いてごらん あの吹雪
が 木々に唸って 狂って 一しきり去った後を
気づかれない様に覗いてごらん 雪明かりだよ 案
外明るくて もう道なんか無くなってゐるが しづ
かな青い雪明かりだよ

PROFILE



小貫岩夫 *Iwao Onuki* (指揮)

同志社大学神学部卒業。同志社グリークラブに所属し、福永陽一郎指揮のもと数々のステージで活躍。その後大阪音楽大学卒業。文化庁オペラ研修所第11期修了。数々のコンクールで優勝・入選する。95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演しデビュー。翌年ドイツ・ケムニッツ市立歌劇場より招聘を受け同役で出演する。98年より文化庁派遣でミラノへ留学。2000年新国立劇場デビューを飾ったのち、様々な舞台で活躍。2013年には平成天皇皇后両陛下御親覧のチャリティ・ボールで御前演奏を行い、お言葉を頂いた。二期会会員。東京藝術大学講師。



坂井美樹 *Miki Sakai* (指揮)

大阪音楽大学音楽学部声楽専攻主席卒業。大阪音楽大学大学院オペラ研究室修了。1999年にイタリアミラノに留学。モーツァルト作曲オペラ「フィガロの結婚」のスザンナ役の他、様々なオペラに出演。特に故岩城宏之指揮、黛敏郎作曲のオペラ「金閣寺」(女役)は東京・大阪で公演され、全国放映された。また桂小米朝(現5代目米團治)とともにオペらくごにも出演。その他多くのコンサートに出演。細川維、高須礼子、田原祥一郎、ブルーノ・ダル・モンテ、ピアンカ・マリア・カゾーニ、田中千都子の各氏に師事。二期会準会員。合唱団 Buona Vita 主催。



土井あかね *Akane Doi* (ピアノ)

大阪外国語大学モンゴル語科卒業 ピアノ・キーボード奏者 作曲・編曲・作詞／オーガナイザー。

多彩な音楽活動を展開するアーティスト。映画、舞台、ゲーム、CMなどに楽曲提供し、自らの音楽制作会社「ドゥーイン・アート」を通じて新たなエンターテインメントの形を追求。ポップスを基盤にクラシックやジャズ、民族音楽も取り入れた幅広いアレンジが特徴で、ジャンルを超えた即興ライブにも定評がある。多才な活動で音楽表現の可能性を広げ続けている。



後藤繁榮 *Shigeyoshi Goto* (MC)

フリーアナウンサー(元NHKエグゼクティブ・アナウンサー)。1975年NHK入局。鳥取、富山、札幌、東京アナウンス室を経てNHK放送研修センターで勤務。2016年フリーとなり、現在、NHK・Eテレ「きょうの料理」、ラジオ第1「ラジオ深夜便〜第1、3、5土曜日」などを担当。また、NHK日本語センター専門委員、NHK文化センター講師としてよりよいコミュニケーションに資する講座も担当。2005年、放送批評懇談会の「ギャラクシー賞」奨励賞個人受賞。著書に『きょうの料理のヒミツ』(平凡社)、『後藤アナのダジャレ教室』(小学館)、ベスト新書『笑顔を引き出す会話力』(KKベストセラーズ)がある。

賛助出演

有機的演奏単位グラ・ディーヴォ

2006年、多田武彦先生の作品を愛するメンバーが自発的に集合し、自然発生的に誕生した有機的な演奏単位。学生から社会人、シニアメンバーまで、十名規模で活動しています。

歌唱者自身の音楽的感性から発信する音楽世界を目指すため、指揮者は置かないものの、メンバーは他の活動において優れた音楽家の指導を受け、技術と音楽性を高め合うことを目指します。また集団としての演奏の最適化を目指すだけでなく、メンバー個人の成長を重視しており、メンバーの一部は、稲葉美貴先生や、外部の音楽家の指導を受けております。多忙な社会人男声でも、継続的に長く活動できるよう、平日夜、週末を織り交ぜ有機的に練習しています。またいわゆる「合唱団」ではないため、入退団や規則はなく、その時、練習したい人、歌いたい人がただ有機的に集まり活動しています。

コーチ・ヴォイストレーナー：稲葉美貴

武蔵野音楽大学声楽科卒業後、渡仏。パリコンセルヴァトワール20区修了、パリエコールノルマル音楽院で研鑽を積む。パリでは、教会や大使館、またサル・ガヴォーにてアンサンブルやソロのコンサートに出演。帰国後、「ドレミキ音楽教室」を開講し、老若男女様々な生徒に声楽、ピアノ、ヴァイオリンを指導している。また、ヴァイオリンと軽楽器による器楽ユニット「お菓子な楽器隊」を結成し、クラシックからライトミュージックまで、幅広い曲目の演奏活動を行っている。

Top Tenor

河村 進 小川 健太朗(おがけん) 佐藤 元哉(モントーヤ)

Second Tenor

松岡 大吾(GDG) 大川 耕史 田中 良憲(タナーカ)

Baritone

山田 浩史 今井 隆

Bass

原田 成仁 田中 剛 八木 陽帆(ジュネーブ) 山田 健悟(やまけん)

大阪男声合唱団東京支部

大阪男声合唱団は、大阪大学男声合唱団(阪大男声)OBの合唱団として1954年12月に発足しました。以来数年間には阪大男声の定演への賛助出演や合唱祭への参加をしていましたが、その後20年余りは休眠状態でした。1982年に東京大、京都大、神戸大、大阪市大の在阪OB男声合唱団とのジョイントコンサートをきっかけに活動を再開し、90年代後半からは草創期のOB達が徐々に戻り合唱団体制も整備され、2001年には大阪にて第1回定演が開催出来るまでになりました。その後東京などでの定演開催も果たし、2012年からは大阪・東京交互に定演を開催しています。近年のコロナ禍により2020年の定演は中止となりましたが、2021年には活動を再開、本年8月には第23回定演を東京の第一生命ホールにて開催し、来年7月19日には大阪の住友生命いずみホールにて創立70周年記念の定演を開催予定です。関東地区においては、2001年に有志により定演にむけた東京での練習を開始し、その後は東京支部としてジョイントコンサートや合唱祭への出演など、単独のステージ活動も行っています。

Top Tenor

国分 和夫 村田 洋一 五十嵐 強

Second Tenor

宇野 肇 富田 義人 江守 茂和 岡部 寛正 二村 修

Baritone

石橋 博 奥野 和人 宮内 誠治 吉海 潤一郎

Bass

鈴木 啓司 甲和 伸樹

本日の出演者

Top Tenor

伊東 昭廣* (1967)	西村 信勝 (1967)	柳楽 行雄* (1970)	中平 悟 (1981)
山崎秋一郎 (1982)	保川 一治 (1984)	坂居 孝二 (1987)	

Second Tenor

赤城 一字 (1965)	加藤 直樹* (1973)	勝原 尚実 (1976)	杉本 啓一郎 (1980)
永谷 勉 (1981)	北村 照夫* (1982)	小林卓郎* (1985)	

Baritone

小笠原 肇* (1963)	新出 武雄 (1963)	西川 哲朗 (1965)	飯塚 一雄 (1969)
浜崎 慎吾 (1969)	鵜飼 茂* (1971)	栗生 昇* (1985)	松村 尚人 (1987)

Bass

村主 寧民* (1963)	大井 耐三 (1969)	真鍋 一史 (1970)	南 雄次 (1971)
上崎 雅也 (1977)	米野 勝 (1979)	片川徳明* (1980)	村川 健一 (1981)
山口 伸 (1984)	木下恒彦 (1987)		

◎カッコ内は卒業年度

◎卒業年度が同年の場合には「あいうえお順」で記載

◎*印は、大阪外国語大学グリークラブOB合唱団(大阪あるいは名古屋)のメンバー



アンケートご協力をお願い

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。
今後の活動の参考とさせていただきたく、アンケートに
ご協力をお願いいたします。